

日本統治期台湾における楊雲萍の詩 —白話詩と日本語詩集『山河』を中心に—

とう こううん
唐 顯芸

はじめに

第1節 楊雲萍の白話詩

第2節 日本語詩集『山河』

第3節 白話から日本語へ

おわりに

(要約)

本稿は楊雲萍の白話詩と日本語詩集『山河』を中心に分析し、その詩創作の歷程を考察することを試みるものである。

第1節では、雑誌『人人』に発表された白話詩を通して、楊雲萍の白話詩創作における模索と進歩の過程をみる。第2節では、歴史研究をする楊雲萍が植民地に生きる知識人として、戦争の最中に日常生活の出来事に誘発された心情を綴った『山河』の詩を分析する。第3節では、『山河』の言語と形式を分析し、楊雲萍における白話から日本語への創作言語の転換について考える。

はじめに

楊雲萍(1906-2000年)¹の日本統治期における文学活動については、白話運動初期に創作した白話小説や台湾最初の白話文芸誌『人人』の創刊に携わったことについてよく言及されている。白話小説に関しては、『人人』で「罪与罪」、『台湾民報』で「月下」や「光臨」、「秋菊の半生」など、1930年までに計9編を発表した。これらの作品は植民地問題を鋭く指摘し、女性の置かれている社会状況を批判するものとして評価されている²。雑誌『人人』は1925年に友人の江夢筆と創刊したもので、二期のみで終了したが、歴史的な意義が大きいとして注目されている。

しかし、小説家としてまた歴史研究者としての楊雲萍に対して、詩人としての楊雲萍はあまり認識されているとはいえない。張恒豪が「基本的に楊雲萍は詩人であり、詩人の知性と感性を持って小説を書いていた」という鋭い指摘をしているものの、この一文は楊雲萍の白話小説を紹介するものであり、詩にはほとんど触れられていない³。林瑞明「山河初探—楊雲萍論之一」⁴、葉笛「詩、真実和歴史—詩人楊雲萍」⁵、さらに『日本統治期台湾文学集成・台湾詩集』⁶に付されている河原功の解説「王白淵と楊雲萍—二人の抵抗詩人」は、楊雲萍の思想と文学活動を論じ、詩集『山河』の詩を分析した重要な文章であるが、三篇とも紹介に留まっているといえよう。

日本統治期において、ほとんどの詩人が創作に用いた言語は中国語(文言文、白話文、台湾話文)か日本語かのどちらかの一つに限られているのに対し、楊雲萍は二つの言語でともに作品を残した珍しい人物である。白話詩は主に1924年から25年にかけて『人人』に発表された。日本語詩は1939年から『台湾日日新報』、『文芸台湾』、『民俗台湾』などに発表され、1943年には詩集『山河』が出版されている。特に日本語詩集『山河』は楊雲萍が当時出版した唯一の文学書で

あり、台湾詩史において重要な位置を占めている作品でもある。以上のことから、楊雲萍の詩人としての業績は、より詳細に研究されるべき課題であるといえるだろう。そこで本稿では、『人人』に掲載された白話詩と『山河』収録の日本語詩を中心に分析し、楊雲萍の詩創作の歷程を考察することを試みたい。

第1節 楊雲萍の白話詩

楊雲萍が初めて発表した詩は「橘子花開」（みかんの花開く）と思われる⁷。掲載された1924年4月21日第2巻第7号の『台湾民報』は発禁になり、のち『人人』第1号（1925年3月）に再び発表されることになった⁸。

徘徊一清香和月撲面來、心懷！

真耶夢？橘子花又開、明月團圓十二回、人何在？樓臺！花如舊、月似昔、杜牧尋春無分！孤燈黯々彼樓臺。

歲月過、韶華邁、焦焦我佇立、佇立我又來、我不憐人背⁹我去、其奈望絕心未灰、月移花影上樓臺一。

夢耶真？橘子花又開、明月團圓十二回、憔悴此身已矣夫？我不憐人亦命哉！人何在？為追昔日剛又來！

徘徊一、清香和月撲面來、人何在？鴉噪庭槐、心懷！

（さまよう一清らかな香りと月の光が頬をなでる、思いはつる。
うつつか夢か。みかんの花がまた開き、明月がまどかになること十二回、あの人はいまどこに。高殿に。花は昔のまま、月も以前と変わらないけれど、杜牧と同じように春を訪ねるのが遅すぎたのだ。孤独で陰気な灯があの高殿にともっている。
歳月が過ぎ、青春の日々も過ぎ去り、焦って私は立ち止まる、立ち止まりながらもまた来てしまった。人が離れていくのを惜しむことはしないけれど、望みが断ち切られても心がまだあきらめきれないのをどうすることもできない。月が傾き花の影を高殿へと移す—
夢かうつつか。みかんの花がまた開き、明月もまどかになること十二回、憔悴したこの身はもはやこれまでか。憐れむことはない、これもまた運命だ。あの人はいまどこに。昔を追うがためにいままたここに来てしまった。
さまよう一清らかな香りと月の光が頬をなでる、あの人はいまどこに。カラスが庭の槐でさわぐ、思いはつる。）

この詩は全編文言で、押韻もしており、中国古典の「詞」とたいへん似ていて、現在我々が考える白話詩とはかけ離れているものである。そのことを、楊雲萍自身も認識していた。この詩が『人人』に掲載されたときには、漢文「吟草集（其一）有序」、漢詩の「迷」とともに、以下の説明が付されている。

這三篇的詩文、是我的旧作、也無有什麼¹⁰價值、只以要告訴兄弟們、我也曾經是這田地故錄出。1924年10月30日夜。

（この三編の詩文は私の旧作であり、何らの価値もないが、ただ私もこのような時期があったことをみなさんに伝えたかったために掲載したのである）。

三つの作品の共通点を考えると、「このような時期があった」とは漢詩文を創作したことを指していると考えられる。『台湾民報』に投稿した時点ではともかく、少なくとも『人人』に掲載された時には、楊雲萍は「橘子花開」を漢詩文の類と見なしたといえる。楊雲萍ののちの回想文によれば、「吟草集」は当時創作した漢詩集であり、『人人』に全文を載せるつもりだった。掲載を中断したのは漢詩を見下していたためであり、そもそも掲載動機は、文言文ができないから漢詩に反対しているのではないことを示したかったからだという¹¹。これに従えば、「何らの価値もない」といっているのは、作品の出来というよりむしろ文言を用いている点についてであり、当時の楊雲萍における漢詩文に対する考えを表している。

しかし、これをもって楊雲萍が漢詩文に真っ向から反対していたとは言い切れない。楊雲萍は白話文に強い共感を持って『人人』を創刊し、誌上で理論と実践の両面から白話文を推進した。しかし、弁解まじりの説明を加えてまで『人人』で漢詩文を発表したのには、のちの回想に言われるような意図があったとはいえ、彼の漢学の素養に対する自負が強く感じられる。

当時白話詩を書く有名な作家たち、例えば頼和、楊華、陳虚谷、楊守愚などは、高い漢学の素養を持ち、白話詩を創作する傍ら、漢詩を書き続けた。詩人たちにとって、漢詩と白話詩は必ずしも対立するものではなかったのである。『人人』を創刊した頃の楊雲萍はまだ台北一中の学生だった。大衆に理解できる言葉によって知識を普及させ、それによって台湾人自らが社会を改革するという理想と強く結びついていた白話文運動は、当時の青年世代にとって非常に魅力があったと考えられる。一方で彼は、幼少の時から文人である祖父より漢学教育を受け、高い漢学の素養を身につけていた。彼のその後の長い人生をみても、漢学は単なる教養というだけではなく、彼の生き方と美的感覚に強く影響していたといえる。このような漢学との深い関係を考えても、若き楊雲萍は白話文に魅了されながらも、意識的にせよ無意識的にせよ、漢学に対しては自負と軽蔑の複雑な葛藤があったことが考えられる。楊雲萍が白話詩の創作を中断した後も、漢詩を作り、『山河』では漢詩への回帰ともとれる表現をみせたことを考えると、最初に発表したのが文言の詩であることは、実に興味深い。

楊雲萍が「白話詩」として最初に発表した詩は、『台湾民報』第2巻第15号（1924年8月11日）に掲載された「這是什麼聲」¹²（何の声だ）（1924年5月22日に創作）であった。詩はこのように始まっている。

哦！這是什麼聲？唉！這是什麼聲？

矛盾！變則！虚偽！醜惡！和膏汗！血淚！所釀成的這是什麼聲？

這樣和平！自由！平等！光明的月下何以有這聲？

唉！我的腦袋已將要破裂了！

那洋式樓臺下賣糶小兒的「糶呀、糶呀。」好可憐的聲，和著那樓臺中喝唱歌舞的聲合奏！（以下略）

（おお、これは何の声だろう。ああ、これは何の声だろう。
矛盾、変則、虚偽、醜悪、それと汗、血涙、醸し出されたこれは何の声だろう。
このような平和、自由、平等、明るく輝く月の下にどうしてこのような声がするだろう。
ああ、私の頭はもはや破裂しそうだ。
あの洋館の下で蒸し餅を売っている少年の「蒸し餅、蒸し餅」というかわいそうな声と、あの洋館の中の歌や踊りの声との合奏よ。）

全編で38行あり、白話詩発展初期にしては長い詩である。この詩は第三者の視点で物売りの少年を語ることを通し、貧富と階級の差を批判している。語り手の視点の変換が上手く行われておらず、「何調」、「何所思」、「汝仰視未」などの文言文の混入には、作者が模索をした痕跡を読み取ることができる。一方、少年の悲惨さを直接的に描写するのみならず、一つの建物を舞台に、その階上で開かれる宴会の歓楽と真下の路上で凍える少年の悲哀という対比の技法を用いたところでは、貧富と階級の差をいっそう鮮明に浮かび上がらせている。先ほど引用した冒頭の部分と詩の結尾では、不平を爆発させたように単語を連呼し、いささか観念的で感情的なところがあることは否めないが、当時においてみると、若き詩人の憤慨と熱意はストレートに読者の心を打ったのではなかろうか。

その後の楊雲萍の白話詩は、全て『人人』に掲載された。第1号に掲載された白話詩は「相片」（写真）や「即興」、「月兒」、「小鳥兒」、さらにタゴール詩の訳¹³「女人呀」などがある。末尾に付された日付によると、創作の時期は1924年の8月と10月に集中している。特に10月に書かれた詩には文言文の混入がほとんどなく、白話詩としての進歩がうかがえる。しかし、作品の大半は詩というより、散文というべきものである。

例えば、「小鳥兒」は「數天前、我的兄弟、捕着一隻的小鳥兒、全身包着青色美麗、光澤的羽毛、就是世俗所叫做青苔仔的」（数日前、私の兄弟が、一羽の小鳥を捕まえた。全身が青い綺麗なつやつやの羽毛に包まれた、俗に青苔仔というものである）と、一羽の小鳥が捕えられ、籠の中に入れられた場面から始まる。最初は自由を欲し、必死に抵抗した小鳥だが、やがて自分が捕まえられたことを宿命とし、籠の中の生活に満足するようになる。そして最後は飼い主に媚びるように毎日歌っているところで詩は終わる。小鳥の変貌する様子を通し、日本の統治に対して、抵抗から服従さらに媚びるようになった台湾人を風刺した寓話と考えられる。この詩について、楊雲萍は「散文詩」と記している。確かに「散文詩」というジャンルはあるが、この作品は論理の飛躍やイメージの提示などの詩的要素がほとんどなく、散文的叙述に終始しているため、詩とはみなしがたい。

『人人』第1号に「詩」と記された作品のほとんどは、このような詩的要素が非常に薄いものである。文言文をやめ、漢詩の形式、押韻などの制限から脱却したことは白話詩創作への第一歩に過ぎない。この時点での楊雲萍は、「白話文」とはいかなるものかについてはある程度理解で

きたようだが、「白話詩」となるために必要なものに関しては、まだ具体的に掴んでいなかったといえる。

しかし『人人』第2号になると、楊雲萍が白話詩の本質に迫りつつある作品が見受けられる。掲載されたのは「夜雨」や「無題」、「泉水」、「暮日的車中」（夕暮れの車中）、「送夢筆哥哥」（夢筆兄さんを送る）、「小詩幾首」などであった。例えば、「泉水」はこのような詩である。

好清冽的泉水啣！
君、君把君的青春淚珠兒滴落吧！
溶帶着淚珠兒的泉水、
定漂去流入妙齡女人們的芳暖血管裏！
（なんと清冽な泉の水よ。
君、君のその青春の涙をしたたらせておくれ。
涙を溶かしこんだ泉の水は、
きっと年ごろの女性の香り高い温かな血管の中を漂っていくだろう。）

1925年8月26日に創作したと記されているこの詩は、初期台湾白話詩によくみられる語気助詞の多用はあるものの、文言文から完全に脱却したといえる。液体という共通性から、詩人は一見関係のない泉と涙と血を結びつけた。女性の血管には、彼女に恋する人の泉の水のように清冽で切なく、甘酸っぱい青春の涙が流れていると連想をつなげてゆくところからは、作者が白話詩におけるイメージの作り方を把握していたことがうかがえる。

さらに、「小詩幾首」は2行から4行の詩を7首集めたもので、ここでは7首目を例にあげてみる。

中秋……、
呵、像着這麼樣、
今宵又要過去了！
（中秋……
ああ、このようにして、
今宵はまた過ぎ去ってゆく。）

初期の台湾白話詩において「小詩」はかなり流行していた。当時紹介された中国白話詩に、謝冰心や梁宗岱らの小詩が多かったことと、小詩は比較的簡単に作れることが要因と考えられる。楊雲萍の場合、さらにタゴールからの直接的な影響も指摘できる¹⁴。この詩の点（「…」）と語気助詞「呵」の使い方や、抒情と哲理の両方を備えているところは、謝冰心の詩「春水」と「繁星」の強い影響がうかがえるように思う。

『人人』第2号の作品群を第1号の作品と比較すると、白話詩創作能力の明らかな進歩が見受けられる。

以上のように、創作の時期に沿って楊雲萍の白話詩をみると、最初期では漢詩の形式を崩してはいるが、表現は完全に文言文であった。次の段階では白話の表現は増えたけれども、なお文言が混じっていた。それから完全に白話で表現できるようになったものの、「白話詩」という新し

い文学形式に戸惑いをみせながら、白話詩となるための詩的要素を少しずつ心得ていった。そこには、白話詩創作における模索の歷程がはっきりと反映されている。多少の相違はあるが、楊雲萍のみならず、おそらく当時白話詩を創作した詩人たちも同じ道りを歩いてきたと考えられる。

ところが、楊雲萍は1926年に日本に留学した後に白話小説を創作してはいるものの、この後白話詩を書くことは二度となかった。原因は定かではないが、詩的言語は非常に凝縮されたものであるため、詩を極めるには言語における高度な能力が特に必要であるということが大きな理由として考えられる。台湾における白話文運動は、文壇の発言権を漢詩文から奪った後、いかに台湾人自身の口語を白話文にし、表現の道具として確立させ、新文学を築いていくかという問題に直面した。楊雲萍は白話文運動の初期、つまり白話文という概念が定着しつつある時期に創作活動を始めたが、次の段階に移行される前に、日本へ留学した。その時期、台湾式の白話文（閩南語と日本語の漢字語も混合している）は文章や小説などを書くための道具として模索されつつあるところで、詩的言語として確立するためにはなお時間が必要だった。

その上、漢詩と白話詩（文語詩と口語詩、旧体詩と新体詩）の隔たりは他の文学形式よりも大きい。白話詩が一つの文学形式として成熟し、確立するためには長い期間と多くの試行錯誤が必要だった。当時の中国においてさえ、白話詩はまだ成熟に向かっている途上であった。白話詩を書かなくなったのは、以上のようなこともその一因として考えられよう。

第2節 日本語詩集『山河』

1932年に台湾に帰郷した後、楊雲萍はしばらく職に就かず、歴史研究と民俗研究に没頭した。この時期の楊雲萍はむしろ文学活動から離れていたといえる。その後、1937年から『台湾日日新報』、『文芸台湾』、『民俗台湾』などに歴史研究の文章を中心に発表し、さらに日本語による随筆や詩の他に、漢詩も創作するようになった。そして1943年11月に台北の清水書店より最初の日本語詩集『山河』を上梓した¹⁵。

『山河』は詩24首を収録し、内容は大きく三つに分類することができる。一つは家庭生活を書いた詩、一つは大稻埕の風物と台南旅行の見聞を描いた詩、もう一つは特定の場所や出来事ではなく、自身の心情を詠った詩である。しかし、その中には「山河」という題名の詩はない。詩集名について、林瑞明は杜甫の名詩「春望」の「国破れて山河あり」によるといい、「……生まれながら日本国籍を背負うことになるのは、当時の台湾人のどうしようもない運命である。楊先生は杜甫の春望を吟じ、『山河』を題名にした。その沈痛な心情がうかがえる」と分析した¹⁶。そのような心情も当然含まれているが、「春望」による「山河」という題名はそれ以上の意味があると考えられる。

まず、「春望」の前半は、国は破れたが山や河などは変わることがない上、春も変わらず破れたこの国にやってきたという、戦火の中にいる杜甫が戦乱による人世の変化と自然の不変を詠ったものである。後半は愛する家族の安否を一番気にかけているのに、確認するための手紙の伝達が難しく、万金に値するという表現で、戦争が個人の生活に与えた影響を描いた¹⁷。『山河』が

出版されたのは戦争の最中である。このような時代を背景に、楊雲萍が詠っているのは読書や研究、家族との日頃の生活である。戦争という個人ではどうにもならない事態に対し、ただ平穏な日常生活を営むことのできる幸せを詠っているこの詩集は、まさに「春望」の趣旨と一致している。その上、「春望」を吟じる杜甫が憂愁を背負ってやまないのは、個人の不幸のためだけではなく、国難によるものでもある。杜甫は、いわゆる「士大夫」意識、すなわち国の政治を担う知識人としての意識と抱負を強く抱いていた。『山河』には、杜甫に似た中国の伝統的な知識人としての自覚が強く見受けられるように思う。題名の「山河」にはこの二点が凝縮されているといえる。

以上を踏まえて、まず内容をみていきたい。詩集は「新年志感」という詩から始まっている。

わが詩篇散じて世上にあり、
わが考抛の文字、先哲と共にとこしへならむ。
奔濤驚瀾の中に、碧空無碍のかなたを觀じ、
道義のみ千古不滅なるべきを知る。

茲に癸未陽暦の元旦、
初日、麗らかに、
梅花槎枒として、
古枝新幹、最も多く花を着す。

1943年の元旦という一年の始まりの日に、去った一年に対する思いと来る一年に対する志を込めて詠った詩である。戦争はあと二年半で終わることや、その後台湾に待ち受ける運命について、楊雲萍は当然知る由もない。人世の紛乱と自然の不変、戦争という大きなものと新年を祝う個人の小さな幸せという対比は、先述した「春望」に通じる『山河』の趣旨である。この詩が一首目であるのは、詩集が出版された年の元旦を詠う詩であるという理由のみならず、序文としての役割も果たしているからであろう。

冒頭の二句に、自分が携わる文学と歴史研究に対する誇りの高さと、その成果に対する強い信念が読み取れる。次に楊雲萍は戦乱の世であるのに対し、天を仰げば、そこには一つの曇りもない青空であると描いた。晴れやかな空は楊雲萍の心の現れでもあり、穏やかな心情になれるのは、「道義」の価値を重んじ、「道義」は必ず実現すると確信しているからだ、と、すぐ次の句で読み取れる。詩の前半からは、楊雲萍の知識人としての強い自覚がうかがえる。後半は心情の陳述から一変し、元旦の風景と梅の花を描写する。もちろん、これは単なる自然描写ではなく、感情を風景の描写に託していると読み取るべきだろう。特に最後の一句は未来に向かう明るい希望が溢れている。

『山河』が出版されたのは戦争の最中であり、皇民化政策が推進されていた時期でもあった。それに対して楊雲萍がどう考えていたのかを、次の詩にみることができる。

「開山神社」

鳥居あり、燈籠があつた。
 隣接の延平郡王祠には大きな錠が下りてあつた。
 乞ふて開ける時、錠が高くかちと鳴つた。
 東廡の或る部屋に、木材の切端が山と積んであつた。
 王の神像は扉の閉つた厨子のやうなものに入れられて、拝する事が出来なかつた。
 王の手植と傳へる梅の木が、青々と茂つて居た。

『山河』を『日本統治期台湾文学集成・台湾詩集』（注14参照）に復刻した河原功は作品解説の部分にこの詩を取り上げ、次のように述べている。

この詩は鄭成功像を見たいと思つたが、扉の閉まつた厨子の中にあつてついに見ることができなかった思いを綴つた詩である。鄭成功像が見られなかったことをサラッとうたっているが、実は皇民化政策で台湾宗教が排斥されている現状を皮肉っているのである。

詩のタイトルの下に、楊雲萍は「南遊雑詩のうち。同神社は記すまでもなく、延平郡王鄭成功を祀れるなり」と付け加えている。この南遊のことに於いて彼は『民俗台湾』第23号（1943年5月）の「点心」欄で次のように言及している。

十数年ぶりて台南に行つて来た.....寺廟や古跡が思つたよりもよく保存されて居たのは愉快であつた。僕はわざと誰にも案内してもらはずに、一人で一日歩きまはつた。只、延平郡王祠の中の多くの「聯対」がしまひ込んであつて、かかへて居ないのはどういふ理かと思つた。.....また郡王祠の入口を、大きな錠で閉ぢて居るのはどうしてであらう。これも善処してもらひたい.....詩を七篇作り¹⁸、家に帰へつてから、二日ばかり寝た。

皇民化政策が推進される中、1940年に改姓名運動と寺廟整理が行われた。この一文からは、寺や古跡が思つたより破壊されていないことに対する喜びと、台湾の伝統的な信仰が禁じられていたことに対する不満の意がうかがえる。このような思いが「開山神社」の詩には込められていた。実際に参拝したのは「延平郡王祠」であるのに対し、あえて「開山神社」をタイトルにしたのは、風刺の意といえよう。一句目はタイトルに呼応して、鳥居と燈籠で神社であることを示したが、すぐ次の句で、目的地は隣接の延平郡王祠なのが見える。「隣接」という言葉が重要なのは、まさに前述したような、伝統ある寺が予想したより破壊されていなかったことを示した上で、それに対する喜びと悲しみが混じりあふ複雑な感情をも表しているからである。題名と最初の二句のみで、このような時代背景と心情が全て表現されている。門を開けるときに錠が高く鳴つたという表現からは、長い間開けられていなかったことが想像される上、一つの言葉なき悲鳴であるとも感じさせられる。後半は、まず冷静な口調で内部の様子を述べた後、最後は外にある梅の木の青々と茂っている様子を淡々と描写して終わる。この終わり方は前述したような「春望」と似た人世の変動と自然の不変との対照であり、この詩に深い余韻と高い格調をもたらした。

ところで、『山河』の詩と第1節の白話詩を比較すれば、全く異なる詩風であることは明白である。成長による心境の変化のほかに、歴史研究者として、知識人としての強い自覚を持つようになったことが、詩の精神に大きく影響していたといえるだろう。

さらに、楊雲萍は自分の作詩について、こう語ったことがある。

即ち小生の作る詩の如きものの大部分は、作らうと考へて作つたものはほとんどなく……小生は少しばかり晚明清初の歴史や台湾の歴史を考へ、学びつつあるものですが、さういふ仕事をしている最中、或ひは大稻埕なぞの巷を歩いて居る時、時として急に詩の如きものが出来てくるのです。……小生の作品は、さういへば、二つの『場所』を最も多く歌つて居るやうに気がつきました。一つは大稻埕の街頭巷上の風物を歌ひ、一つは家庭に於ける日常茶飯を吟じたものです。そして、前者は憂愁に、後者は多く閑適な境地になつて居るやうです¹⁹。

当時の楊雲萍は、創作を目的に詩を作ったのではなく、詩という文学形式を通して、日常生活の出来事に誘発された心情を綴ったのであり、その時々を思いを飾りのないままに吟じ上げていた。そのため、『山河』には家族に対する愛情で幸福感溢れる詩もあれば、植民地に生きる知識人として憂愁と使命感を背負っている詩もあり、常に明朗と憂愁の間に揺れる楊雲萍の姿が、余すところなく映し出されている。

次に『山河』における言語など形式の面について考えることにしたい。

第3節 白話から日本語へ

上述したように、『山河』は台湾で生活しながら、晚明清初の歴史や台湾の歴史を考える仕事の最中や、大稻埕の巷を歩いている時などに湧いてきた心情を詠う詩である。ところが、その創作言語は日本語であり、つまり内容とそれを表現する道具が異なる文化基盤を持っているのである。そのため、両者の間にずれが生じてくる。『山河』には単語の使い方とルビの振り方において、その両者のずれがはっきりと映し出されている。

「匆忙」という詩を例にあげてみる。この詩は大稻埕へ友達を訪ねにいったが、誰一人家にいなかったことを詠ったものである。友人に会えなかった楊雲萍が酒樓へいき、食事をする段落では、次のように書かれている。

小さな酒樓にわれは上つた、
一皿の意麵（いみい）と、一人前の焼売（しょうまい）と、
さて、老紅酒の一瓶。

「意麵」は平らな玉子入りの麺で、台湾の庶民的な食べ物である。「焼売」は当時の日本にもすでに入っていた中華料理である。前者は台湾の食べ物とはいえ、「麵」と書いてあれば読者はなんとなく想像できるだろう²⁰。しかし、ここで楊雲萍はわざわざルビをつけた上、「いめん」ではなく、閩南語読みの「いみい」をつけた。さらに「焼売」は、日本語で定着している「しゅー

まい」という呼び方ではなく、閩南語の「しょうまい」をつけている。ここで考えられるのは、楊雲萍が台湾色を出そうとしていることである。その理由には庶民に密着しているものこそ、原語のほうがニュアンスが伝わりやすく、親しみが感じられるからということが挙げられる。自分の日常生活を写實的に描写する楊雲萍にとって、この点はとても重要だったと考えられる²¹。

しかし、そもそも楊雲萍がこのような内容を日本語で書くのはなぜだろう。

第1節で述べたように、楊雲萍は白話詩創作の困難に直面し、そのまま創作を中断したと考えられるとすれば、彼が日本留学を経て台湾に帰郷した後に白話詩創作を再開することは、より難しいことであつたと想像できる。日本統治期の作家における創作言語の選択には、世代のほか育つた環境、思想、社会状況などの様々な原因が考えられる。楊雲萍の場合、世代的には日本統治が始まった後に生まれた「中間世代」²²にあたる。彼は台北一中に入学した最初の台湾人の一人であり、さらに日本留学の経験があることなどを考えると、日本語教育を受け、日本語が堪能であるのみならず、日本語は学問を吸収するための手段であり、自己表現の道具として欠かせないものとなつていたことが考えられる。統治者側の言語を用いずには自己表現ができない、という境地に追い込まれた当時の知識人の苦しい心情と常に存在する心の葛藤は、多くの文章に滲んでおり、いまでも鮮明に映し出されている。

一方、楊雲萍が『山河』を発表したのは戦争の最中であり、皇民化政策に拍車がかかった時期であつた。漢詩文と白話文が全てのメディアから消えたわけではないが、発表の場は少なくなり、内容が限られていたのも事実である。その上、日本語で創作することは、下村作次郎がいうように「むしろ台湾人としての民族の自負でもあつた」²³。日本語で表現することにより、少なくとも日本人と平等な発言の最低限の位置に立つ可能性が出てくる。楊雲萍はかつて『人人』で自分の漢詩文を発表し、漢詩文ができるけれども反対をするという姿勢をわざわざみせたような反骨精神を持つ人物である。それと同じように、日本語で日本統治を批判することにこそ意義があり、日本語を表現道具としながら、日本語の固定観念を崩し、台湾特有の日本語文学を作り上げたところに、楊雲萍の知識人としての自負心がうかがえる。

ところが、楊雲萍と他の日本語詩人とは大きな相違がある。『山河』に用いられた日本語は口語ではなく文語だつた。詩中の漢語表現と文体は漢詩に強く影響されており、文語であることは詩の内容と関係していると思われる。

楊雲萍の作詩は第2節で述べたように、仕事と日常生活で湧いてきた心情を吟じるものである。その仕事とは漢籍と密接な関係があつた。普段の読書について、『左伝』、『尚書』、陶淵明の詩などが『山河』の詩に記されている。楊雲萍の当時の生活は中国の古典と深く関わっていた。そのため、考えることや、感じることなどを綴つた詩に漢詩の影響が見られるのは当然といえる。それを日本語で表現するとき、口語ではなく文語を用いたのは、まさに内容に応じるための選択だつたのであろう。

一方、文語であることは『山河』の詩をより詩的にみせるという効果があつたといえる。心情を素直に歌い上げ、風景をありのままに描いた『山河』の詩は、散文的などころがあるのが否めない。一歩間違えれば、ただの乾燥無味な記述文になりかねない表現が、楊雲萍初期の白話詩とは

異なり、詩であることを保つことができたのは、一つには『山河』の詩に「余白」があるからである。余すところなくただ陳述するのではなく、表現しようとする心情と表現する言葉の間に距離を置き、風景の描写を通して心象風景を表すことなどによって、『山河』の詩における詩的要素は高められている。その中に、文語は韻律の面で詩的要素を構成するのに役立ったといえるだろう。

『山河』は日本語詩集であることとは裏腹に、その内実是一種の漢詩への回帰²⁴と考えられる。白話詩の創作で詩的要素という問題に衝突した楊雲萍は、日本語詩の創作でもそれを解決できなかった。結局幼少の頃から祖父に教わった漢学の素養が、彼の詩に対する美的感覚を形成したといえるのではないだろうか。

楊雲萍の詩の創作においては、その形式は変化しているものの、内面的には『山河』と「橘子花開」は繋がっているといえるだろう。

おわりに

以上楊雲萍の白話詩と日本語詩を分析しながら、その創作の歷程をみてきた。

白話詩においては1924年という早い段階から創作したため、漢詩から移行する際の模索の軌跡が、はっきりと残されている。台湾の白話詩発展における困難や、その挫折と進歩の道のりを、実作を以て示しているといえるだろう。しかし、楊雲萍が白話詩を創作したのは2、3年のみであった。模索の途中で中断は、同時に成熟した白話詩作品がまだ創作不可能であったことを意味している。

結局、楊雲萍が詩人としての名を確立させたのは、日本語詩集『山河』によってである。

『山河』の重要性は、まずその内容に戦火の下に生きる植民地の知識人の苦悩と生き方を観察することができる点にある。次に、『山河』には、白話詩を創作したのち日本語詩に転換した楊雲萍の詩に対する美的感覚や、詩となるための要素に関する考えなどが読み取れる。それは当時の詩人が詩を創作するにあたり、直面した技術面の問題点とその解決策の一つの例を提供しているといえるだろう。さらに、『山河』は漢詩の精神と深く関わっており、漢学の素養を身につけながら漢詩ではなく日本語詩を創作した楊雲萍は、台湾詩史において、独特な風格を作り出した。

楊雲萍の経歴に関してはまた不明な点が多く残されている。特に日本での留學生活が彼のその後の人生、研究と文学活動の両面にどのように影響したのかは、現存の資料で分析することが非常に困難である。楊雲萍の詩、その文学活動をより詳細に解明するために、今後さらなる調査を継続していきたい。

注

- 1 本名楊友濂、台北士林生まれ。祖父の楊錫侯は文人であり、父親の楊敦謨は祖父から漢学教育を受け、のち台湾総督府医学校を卒業して開業医となった。楊雲萍は幼少の頃に祖父と一緒に住み、漢学を教えられ、高い漢文素養を身につけていた。1921年に台北州立第一中学校に入学、1926年に

- 日本大学の予科に留学し、二年後に文化学院文学部創作科に入学した。卒業した後、1932年台湾に帰郷。1939年台湾詩人協会の創立に連名し、1943年には台湾代表の一人として第二回大東亜文学者大会に参加した。同年11月に日本語詩集『山河』を出版した。戦後は歴史学者として活躍した。
- 2 張恒豪「詩般的美感与深意——楊雲萍集序」『楊雲萍・張我軍・蔡秋桐合集』台北、前衛出版社1991年、14-15頁。
 - 3 同前注、14頁。
 - 4 『台湾文芸』第88号、台北、台湾文芸雜誌社、1984年。
 - 5 『台湾早期現代詩人論』、高雄、春暉出版社、2003年。
 - 6 緑蔭書房、2003年。
 - 7 『台湾民報』に掲載時の日付によれば、創作したのは1924年3月30日である。
 - 8 その経緯については『人人』第1号参照。
 - 9 『台湾民報』に掲載されたときは「背」だったが、『人人』の再掲で「去」となっている。意味を考えると、誤植だと思われる。
 - 10 原文は「是麼」。楊雲萍の当時の文章を見れば、「是麼」は現在使用されている「什麼」の表記であるのが推測できる。本稿では「什麼」に直して表記する。
 - 11 「『人人』雑誌創刊前後」『日抛下台湾新文学・明集5、文献資料選集』、台北、明潭出版社、1979年、328頁。
 - 12 『台湾民報』に掲載された時は「這是是麼聲」だった。注10を参照。ちなみにこの詩を収録した遠景出版社の『乱都之恋』は「甚麼」、明潭出版社の『詩選集』は「什麼」と表記している。
 - 13 楊雲萍によると、タゴールの英詩から訳したという。前掲「『人人』雑誌創刊前後」。
 - 14 中国の小詩は全体にタゴールが与えた影響はもとより大きい。しかし、楊雲萍はタゴールの原詩を読んでおり、『人人』第1号にその英詩を一首翻訳したことから、タゴールの詩から直接的な影響を受けたと考えられる。
 - 15 筆者の手に、楊雲萍手書きの『山河新集』があり、『山河』と他の詩を全部収録している。序をみる限りでは刊行する予定であったようだが、実際に出版したかどうかは未確認である。なお『山河』は800冊ほど出版されたが、戦火によって殆ど散逸したといわれている。2003年『日本統治期台湾文学集成・台湾詩集』（河原功編集、緑蔭書房出版。同集はほかに王白淵『蕨の道』、上忠司『その日暮らしの中から』、黒木謳子『南方の果樹園』を収録する）が出版されたことにより、ようやく『山河』の全貌を比較的に容易にみられるようになった。
 - 16 原文は「……出生即要背負日本国籍、這是当時台湾人莫可奈何的命運、楊老吟誦杜甫的春望、以『山河』為題、心情沈痛可知」。林瑞明「山河初探—楊雲萍論之一」、同注4、198頁。
 - 17 春望の全文は「国破山河在、城春草木深、感時花濺淚、恨別鳥驚心。烽火連三月、家書抵万金、白頭搔更短、渾欲不勝簪」。
 - 18 『山河』に収録されている「新町」もこの旅で書いた詩である。しかし『山河新集』で「南遊雜詩」と題したものとしては、この二首のほかに合わせて五首しか収録されていなかった。
 - 19 『文芸台湾』第5巻第1号「鷄肋」欄、1942年10月。
 - 20 読者は日本人でも台湾人でも漢字が理解できる。楊雲萍が想定した読者は定かではないが、ルビの振り方からは、読者の理解のためというより、詩としての表現と完成度に重点を置いているといえる。
 - 21 この点については楊雲萍の日本語創作に対する強い主張と意図があると考えられる。それについては別稿で論じたい。
 - 22 世代の概念と分類は周婉窈「『世代』概念和日本殖民統治時期台湾史的研究」『海行兮的年代—日本殖民統治末期台湾史論集』、台北、允晨文化出版、2003年2月を参考。
 - 23 下村作次郎『文学で読む台湾』、田畑書店、1994年1月、63頁。
 - 24 楊雲萍における漢詩への回帰については、また別稿で論じたいと考えている。